

## 陸機史傳體文學研究

王, 昊聰

<https://hdl.handle.net/2324/4495987>

---

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏 名 : 王昊聰

論 文 名 : 陸機史傳體文學研究

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国六朝時代を代表する文人の一人、陸機（261～303）についての研究をまとめたものである。従来、この文人に関する研究は、既に相当数の蓄積があり、その経歴や作品解釈の幾つかには著しい異説も存在する。筆者は、ここ九州大学において中国のみならず日本における六朝文学研究にも触れ、これら日中両国の研究を総合して、新たな陸機研究の方向性を模索すべく努力した。その成果がこの学位請求論文である。

序章「陸機と史伝体文学」は、本論文標題に掲げる「史伝体文学」についての定義と、その具体的作品の列挙を行った。これまでの多くの陸機研究では、ある特定の有名な作品に焦点をあて、その読解に専念するのが一般的であった。例えば、彼の文学理論を述べた「文賦」や、祖国の呉を離れ、西晋のみやこ洛陽に向かう道中での詩歌群（「赴洛二首」など）、また後世に多くの続篇を生んだ「楽府」と呼ばれる作品群などである。しかし、六朝文学の代表的精華集である梁の昭明太子『文選』に収録される陸機の作品は、上述の三種に留まらず、「表・序・頌・論・連珠・弔文」など更に多くの文体がある。実は、陸機は、昭明太子『文選』の中で収録数最多を誇る文人なのだが、従来の研究では、一部の有名作品のみに関心が集まり、その後半巻に収録されるこれら「表・序・頌・論・連珠・弔文」などの実用的（＝朝廷内で上奏されたり、史論として参照された）文章は、ほとんど顧みられることが無かった。しかも、これら「表・序・頌・論・連珠・弔文」といった各種の文章には、これを総括する簡便な名称がこれまで存在しなかった。そこで筆者は、これを「史伝体文学」と名付け、これらの作品が創作された時期や、その背景などについて考察し、陸機の宮廷内での文筆活動を明らかにしようとしたのである。併せて、彼の洛陽上京の時期についても、多くの異説を整理して掲示した。

第一章は「晋書限断論と陸機」と題した。「限断」とは、歴史書（断代史）を編集するに当たって、その王朝の紀元、すなわち断代史の起筆時期をどこに定めるのかを議論することである。陸機の仕えた西晋王朝の場合、その皇統は三国魏の名臣司馬懿（179～251）にまで溯るため、その限断には、元号で示すと正始説（240）、嘉平説（249）、そして泰始説（265）の三つの論説があった。このような状況の中で、実は陸機は、更に加えて太康説（280）という新しい説を提出していたことが、後世の佚文資料などから確認されている。祖国の呉の降伏を以て、はじめ

て統一国家としての晋王朝が成立したとするものである。もちろんこの説は採用には至らなかったが、旧呉国出身者としての陸機の涙ぐましい矜持を窺い知ることができる。

第二章「陸機『弔魏武帝文』の創作動機」は、三国魏の皇祖である曹操（155～220）に対する弔文の考察である。この文章には、陸機が実際に晋の宮中で見ることができた曹操の「遺令」が紹介されている。従来このように曹操の遺言を暴露することは、曹操の英雄性を否定し、彼を貶めようとしたものだ、との解釈が一部で行われていた。しかし筆者は、改めて弔文全体を読み解き、その解釈の不当を論証した。陸機には、武将であるとともに、文学にも造詣が深い曹操に対し、たかく敬仰する気持ちがあったのである。

第三章「陸機『漢高祖功臣頌』の執筆と皇太子司馬適」は、漢の劉邦（前247～前195）と彼を支えた31の功臣についての頌詞の考察である。この作品は過去の研究ではほとんど取り上げられることのなかったものである。筆者はその文章の表現や構成に着目し、それが班固『漢書』最終巻「述贊」の措辞を少なからず踏襲したものであることや、31功臣の登場順も同じく『漢書』に一致することなどから、これが当時の王宮における皇太子教育のための副教材のようなもの（『漢書』100巻前半の便利な読書案内）であったことを突き止めた。時に、西晋の王宮には皇太子司馬適（278～300、諡は愍懷太子）が存命しており、太子洗馬などの職位にあった陸機はまさにその教育係として近侍していたのである。

第四章「陸機『演連珠』と西晋の秀才策問」は、上奏文などに使われる文例集「演連珠」五十首についての考察である。従来の研究では、主にその修辞技巧や西晋時代に流行した玄学との関連性に分析が集中していた。「演連珠」の製作時期について、不明である。しかし改めてその五十首全体を読み返してみると、その歴史典故に呉国の事柄を避ける傾向にあること、玄学流行の中にありながら意外にも堅実に儒家の経書をしつかりと踏まえた表現が多いこと、そして東西南北の方角指示は、まさしく帝都洛陽からの視点に一致することが判明した。この作品も陸機が西晋の王宮に出仕していた頃のものであるだろう。なお、彼が試験官となり、旧呉国出身の後輩紀瞻を秀才に登用した際の「策問」もこの「演連珠」の表現に一致する部分があり、これらの執筆がほぼ同時期であった可能性が高い。

結論の章「陸機と西晋元康時代」では、まさにこれらの作品が創作された西晋元康年間（291～299）の政治背景と陸機の官歴とを提示しながら、陸機の作品理解において、今後、最も重要な人物として、皇太子司馬適の存在が挙げられることを指摘した。かくいう司馬適は西晋第二代皇帝司馬衷（恵帝）の長男で、英邁の誉れ高かったが、外戚の賈謐との対立によって皇嗣の位を廃され、翌永康元年（300）謀殺される。本論文に挙げる陸機の「史伝体」の作品群が、その創作の背景などに不明な箇所が多いのは、このことが大きく影響しているであろう。そして、陸機本人もまた、相継ぐ王子たちの反乱（いわゆる八王の乱）の中、太安二年（303）刑死するのである。